

伊東一郎編 『スラヴ民族の歴史』

(山川出版社、2023年)

三 浦 清 美

本書は、森安達也編『民族の世界史10 スラヴ民族と東欧ロシア』山川出版社、1986年（以下、『民族の世界史10』と呼ぶ）を3分の2ほどの分量に縮小したものである。

旧著『民族の世界史10』は、書評子にとって非常に思い出深い本である。自分の学問の基礎をつくってもらった学恩のある本という自覚がある。書評子の敬愛する師や師匠格の先生方が、仕事盛りの壮年期に持てる力のすべてを傾けて成ったという趣のある本が、旧著『民族の世界史10』にほかならない。若くしてその著者たちの一人となられた伊東一郎が、本書『山川セレクションスラヴ民族の歴史』（以下、『スラヴ民族の歴史』と呼ぶ）というかたちでの、『民族の世界史10』復活の責を全うした。伊東は序文で、「本書が不世出のスラヴィストでいらした森安先生に恥ずかしくないものになっていることを祈るばかりである」と述べている。

伊東はその序文において、『スラヴ民族の歴史』の発刊の趣旨を説明している。そもそも旧著である『民族の世界史10』は、「従来ソビエト・ロシア史と東欧史という2つの枠組みで別々に論じられてきたスラヴ民族の歴史を諸民族の相互関係の歴史として通観し、あわせて共通性の多いスラヴ民族の民衆文化を通文化的に概観するという趣旨で編まれた」ものであった。ところが、『民族の世界史10』は激しい時代の変遷にさらされることになる。「40年近く前に

この原書が出版された当時、連邦国家ソ連もチェコスロヴァキアもユーゴスラヴィアもまだ存在しており、東西ドイツはまだ統一されていなかった。2020年代を迎えた今、解体と分裂を重ねて細分化され、隔世の感があるスラヴ民族である。しかしその歴史の全体を各国史という縦割りではなく、民族相互の関係史として俯瞰した歴史書がその後もいまだにないことに鑑み、今回の出版計画が立てられた」のだという。

教科書の編集で定評のある山川出版社は、2022年後半から、新版世界各国史のシリーズを中心に旧著のコンパクトな縮約版を、『山川セレクション』というシリーズで再版している。それは、2022年2月24日に始まったロシアのウクライナ侵攻によって、ポスト冷戦が終わり、時代が新たなフェーズに入ったという自覚に基づくものであると、書評子は認識している。ロシア連邦大統領プーチンが「帝国」の復活、ソ連への回帰を目論んでウクライナに兵を送ったことはよく知られており、たしかにその通りではないか（フェイクではない）と思うのだが、ソ連という「帝国」が厳然として存在していた時代の所産である『民族の世界史10』は、こうした「帝国」的な現状を知るうえで格好の書である。

冷戦時代、NATOに対抗したワルシャワ条約機構に属した国々は、スラヴ民族が構成する東欧の国家が多かった。まだまだ若かった書評子は不覚にも、アメリカと世界を二分した共産主義陣営は、スラヴ民族の一体性を基盤に成立したのだと思い込んでいた。1971年木村彰一によって設立された東京大学「ロシア語ロシア文学科」は、1994年に「スラブ語スラブ文学科」に改称している。冷戦終結後それぞれがまったく別の道を歩むことになったスラヴ諸国の一体性を疑う人は、珍しかったのではないのだろうか？ また、ソ連といういま思えば巨大すぎる国家の一体性を考えるとき、ソ連が有していたカフカズや中央アジアへの統制も考慮に入れなくてはならない。1978年に設立された北海道大学の「スラブ研究センター」も、こうした事情を反映してか、2014年に「スラブ・ユーラシア研究センター」に改称した。スラヴの視座とユーラシアの視座は、ロシアを結節点として微妙にリンクしているのである。

『民族の世界史10』はスラヴ民族の文化圏を中心としているが、スラヴ諸

国だけではなく、ソ連とその後継国家であるロシアが関係を結んだ中央アジア、カフカズ、南スラヴ諸国がその支配を受けたオスマン帝国をも射程に入れている。永田雄三による熱い記述（「オスマン帝国とスラヴ民族」）に端的に現われたように、キリスト教文化圏だけではなく、イスラーム文化圏をも視野に収め、スラヴ文化圏を考えていくことが旧著の特色であったが、本書もこの雄大な視野を継承している。スラヴの視座とユーラシアの視座の共有が本書の特色であると言えるのではないだろうか。

『スラヴ民族の歴史』は4章からなる。そのほか序文と索引がついている。

第1章「スラヴ民族とは」は伊東一郎によるもので、「国家形成以前のスラヴ人」、「分裂と移住」、「地理的環境」の3つの節から成る。国家形成以前のスラヴ人の生活のありさまが、考古学資料やおもにギリシア語を使用した東ローマ帝国の文筆家らによる記述を中心に再現され、彼らの居住地域が広がる地域の地理的環境が概観される。

第2章「スラヴ民族の言語と宗教」は栗原成郎、森安達也によるもので、「スラヴ民族の言語」、「スラヴ民族の宗教」の2つの節から成る。第1節では、東スラヴ語群、南スラヴ語群、西スラヴ語群に分かれるスラヴ語の全体像と、キュリロス、メトディオス兄弟による古代教会スラヴ語の創造が画期となったことが示される。第2節では、スラヴ民族が全体としてはキリスト教を受容したものの、ローマ教会、フランク教会などラテン語を主に使用する西方教会からキリスト教を受容したグループ（ポーランド、チェコ、スロヴァキア、クロアチア、スロヴェニアなど）と、コンスタンティノープルから古代教会スラヴ語を用いる東方正教を受容したグループに分かれ、それぞれが異なった文化圏を形成したことが述べられる。

第3章「スラヴ民族の歴史」は森安達也、直野敦、永田雄三によるもので、本書の中心を成すと言ってよいだろう。この章は、「キリスト教の受容と国家の形成」、「ビザンツ帝国とスラヴ民族」、「スラヴ民族とゲルマン民族」、「スラヴ民族と周辺諸民族」、「民族の独立とパン・スラヴィズム」、「オスマン帝国とスラヴ民族」の6つの節から成っている。第1節でスラヴ民族の国家の形成とキリスト教の受容が密接な関係にあったことが示されたのち、第2節でビザ

ンツ帝国とスラヴ民族との関係がおもにロシアを中心に、第3節でゲルマン民族とスラヴ民族の関係がボヘミア、ポーランドなど西スラヴ人を中心に述べられるが、ロシア、クロアチア、スロヴェニアとの関係も十分な分量で扱われている。第4節では、バルト系、ウラル系の諸族、ユーラシアの遊牧民、中央アジア、カフカズの諸民族、東欧のユダヤ人などについて述べられている。第5節では、ロシアのスラヴ的メシアニズム、ドイツ人との確執から生まれたボヘミアのスラヴィズム、ハプスブルグ帝国とオスマン帝国に挟まれたクロアチア、セルビア、ブルガリアのスラヴィズムなどが述べられる。スラヴィズムというのは、スラヴ民族の一体性に基づく「帝国」への願望と読み替えてもよいのかもしれないが、書評子は、クロアチアとセルビアにおける「スラヴの統一」の理念が、ついに東西教会の亀裂を乗り越えられなかったことに注意を払いたい。ロシア・ウクライナ戦争も、東西教会の亀裂という同じ文化的コンテクストのうえて起こっているように思われるからである。第6節は、南スラヴを中心にオスマン帝国支配下におけるムスリムとキリスト教徒である南スラヴ諸民族の確執と共存について述べている。

第4章「近現代世界におけるスラヴ民族」は川端香男里、菊池昌典、伊東一郎によるもので、「スラヴ世界と西ヨーロッパ」、「社会主義とスラヴ民族」、「ソ連崩壊後のスラヴ民族—分断と対立」の3つの節から成る。この章は、全体がすぐれた文明論になっているように思われる。第1節では、スラヴ世界とルネサンスに端を発する西欧の価値観との確執が、おもにロシアを中心として述べられる。第2節では、共産主義、社会主義の理念がスラヴ諸国にどのような影響を与えたのかが、スターリンのソ連とティトのユーゴスラヴィアの対比によって述べられる。社会主義の光と闇が公平に見渡されていると思う。第3節は伊東による書下ろしで、ソ連崩壊後のユーゴスラヴィア内線、ロシア・ウクライナ戦争をも含むスラヴ諸国の現代史の概観である。

『スラヴ民族の歴史』は今読んでも、どの章のどの節も叙述は精彩を帯び、読んでいたいへん面白い。書評子は自らの研究の歩みと対比しながら読んだが、ここでは、『民族の世界史10』から転載されなかった部分についても述べておきたい。

『スラヴ民族の歴史』の上記の各章は、平和の可能性を示唆するよりも、血で血を洗う戦いの所以を理解するのに役立つであろう。内戦、戦争といった動乱が一つの契機となって再版におよんだことは否定しえないので、致し方ないことだと思う。だが、動乱にあがくスラヴ諸民族のあいだに平和が実現する可能性を示唆してくれる『民族の世界史10』第III章が、森安による「宗教」を除き、文字通り割愛されてしまったのは確かに残念なことには違いない。そこには、「民間暦」、「神話と民間信仰」、「口承文芸」、「音楽と舞踊」、「生活文化」に関する、分量にして150頁分の豊かな叙述がある。おそらく「スラヴの一体性」という考え方がいまでも有効でありつづけているのは、言語学と民俗学なのではないかと筆者は思う。

互いに深く傷つけ合ってしまったスラヴの諸民族が兄弟殺しを止めて平和を取り戻すには、第III章で詳述された共有の深層文化を再確認し、共通点と相違点をもつ相互の生活文化を尊敬しあうことを出発点にするしかないのではないだろうか？だから書評子は、『民族の世界史10』第III章の部分も何らかのかたちで再版されてほしいと切に願う。以上のような事情で、『民族の世界史10』が『スラヴ民族の歴史』というかたちに生まれ変わってふたたび世に出たことを歓迎するとともに、その再版によって旧著『民族の世界史10』の価値が失われるどころか、逆にますます高まったことを強調しておきたい。『民族の世界史10』も『スラヴ民族の歴史』同様、老若を問わずスラヴ、ユーラシア研究者の必読書でありつづけている。

